

みんなが笑顔

「僕たち三年生にとって、中学校生活最後の体育大会。自分たちの力で成功させたい、最高のものにした。」

一学期の終わりに、僕は初めて応援リーダーに立候補しました。心の中には、これまでの体育大会に対する後悔がありました。

大きな声が出せなくて盛り上がりえず、先輩に圧倒されて終わった一年の体育大会。まとまりがなく、不完全燃焼のまま、先輩どころか後輩にまで負けてしまった二年の体育大会。

「このまま終わらせたくない。」
その強い思いが僕を動かしたのです。

夏休み中、何度も学校に来て、他のリーダーたちと相談を重ね、準備をしました。この間にどれだけの準備ができるかが、重要でした。

今年は、練習期間が六日間しかなかったからです。

体育大会成功のために、優勝するために、僕たちは変わらなくてはいけないと決心しました。自分たちの声をしっかりと出し、気持ちと力を結集して表現することを目標にしました。応援演技は、速い動きを多く組み合わせ、複雑にしよう決めました。全員が心を一つにして行わないとできないものに挑戦したのです。そのために、応援の流れや動きを考え、小道具を作りました。また、学年のみんなに伝えるために動きを入念に練習しました。

「できる限りの準備をした。」と思いつながらも、僕は不安でした。

「応援リーダーからの提案にみんなは賛成してくれるだろうか。今年もまたバラバラになってしまうのではないか。」

みんなの気持ちが高まったとしても、時間は限られています。

「本当に、この応援演技を完成できるのか。」

不安と焦りが、ずっと僕につきまといまいました。

二学期になり、体育大会の練習が始まりました。悩んだ結果、すぐにでも応援演技の練習に入りたい気持ちをおさえて、まず学年集会を行いました。リーダーが分担して、どのような演技をめざすのか、どのような流れや動きなのか、どのような練習計画なのかを説明しました。みんなで頑張りたいという思い、これまで考えてきたこと、準備してきたことを精一杯訴えました。僕が一番にやらなければいけないのだという強い気持ちでした。説明を聞いているみんながどんどん真剣な表情になり、気持ちが高まり、ひとつひとつになっていくのを感じました。

説明後すぐに、動きの練習を始めました。

みんなは応援の練習に集中し、複雑な動きをすぐに覚えていきました。



休憩時間も積極的に練習し、細かいところもお互いに何度も確かめ合いました。その様子を見て、「みんなが応えてくれている」という実感がわき、ずっと抱いていた不安は消えました。その後も集中した練習を続け、ついに、僕たちは応援演技を完成することができました。最終リハーサルの様子を撮ったビデオを見終わった時、誰からもなく大きな拍手が沸き起りました。僕たちにとって初めての経験でした。

体育大会当日。

僕たちは一つ一つの競技に精一杯の力を出していきました。やがて、競技を終えて応援席に戻ってきた選手に互いに声をかけ、拍手をし、ハイタッチで迎えるようになっていきました。僕たちはみんなの笑顔に迎えられ、体の疲れは消え去っていきました。

しかし、応援演技の直前のことでした。「これだけは負けない。」と思っていた綱引きで、僕たちは二年生に負けてしまったのです。悔しさと泣き出す人もいる中、リーダーの一人が、

「自分たちと向き合おうや。自分たちの応援を完璧にやって、思いを伝えようや。自分たちはこれまでとは違うはずや。」
とみんなに呼びかけました。

練習の成果を出し切った応援演技の後、僕たちはみんな、

「ありがとう。」

と言いながら泣いていました。

全ての競技と演技が終了し、結果が発表されました。僕たちは応援の部で最優秀賞に選ばれました。しかし、総合の部では、二年生に負けてしまいました。本来なら、総合優勝を逃して悔しいはずなのに、僕はすんなりと負けを受け入れることができました。周りを見ると、みんなが笑顔でした。

後日、みんなが書いた体育大会の感想を先生が僕に見せてくれました。僕は思わず涙が出そうになりました。そして、みんなの笑顔が思い出されました。

